

## マタイによる福音書2章13-23節 「幼子の逃避行」

### 1A エジプトにて 13-15

1B 幼子を守る主 13

2B 出エジプトとの一体化 14-15

### 2A ラケルの泣き叫び 16-18

1B 王による虐殺 16

2B バビロン捕囚との一体化 17-18

### 3A ナザレ人 19-23

1B 王の死 19-22

2B ナザレへの帰宅 23

## 本文

今朝は、マタイによる福音書2章の後半を読んでいます。前は、イエス様がベツレヘムに誕生してから、東方からの博士あるいは賢者がエルサレムのヘロデ大王を訪問しました。そして東方の博士らが、星に引導されてベツレヘムにおられる幼子イエス様に謁見することができ、そこで贈り物と共にイエス様を拝することができました。ところが、ヘロデのところに戻ってはいけなとの戒めを、夢の中で受けてエルサレムに戻らず、別ルートで帰ったのです。そして今朝、見ていくところは、ヨセフに対しても主の使いがヘロデの手から逃げなさいと言い、ヨセフと幼子、マリヤの逃避行が始まるという部分です。

2章において特徴的なのは、その逃避行の中で幼子イエス様が、イスラエルの歴史を辿っているということです。エジプトに下ります。そして、多くのイスラエル人の男の子が虐殺されます。そして王が死にます。死んだので、再び戻ってきます。これが、これから読んでいくことです。でも、何か聞いたことのある話ではないでしょうか？そうです。まさに出エジプト記です。ヤコブの家族がエジプトに下り、そこで増え広がり、エジプトのパロによって男の子はナイル川に投げ入れられ、そしてモーセを神は起こされますが、モーセは王を恐れてミデヤンの地に行きます。そしてエジプトのパロは死にます。それから、またイスラエルのところに戻ります。幼子イエス様は、神であられるのに人として来られただけでなく、イスラエル人として来られたということです。イスラエルの民を贖われる方として、イスラエルの人たちと一体化したのです。しかも、その苦しみと悲しみの歴史と一つになることによって、彼らの救い主とされました。

東日本大震災の直後の原発事故のことを思い出します。日本には多くの宣教師がいますが、原発事故が起こった時に宣教師の間で二つのことが起こりました。一つは、逃げたことです。沖縄に行ったり、海外に逃げました。もう一つは、全くびくともせず日本人と全く変わらず生活をして、津

波の被災地に向かって救援に駆け付けた人々です。少し原発も落ち着きを取り戻した後で、逃げに行った宣教師たちの一部が、再び日本に戻ってきました。私たちは、大震災による津波と、原発事故という二つの痛みを持っていますが、そこを共に通った人と、肝心のところでいなくなって、戻って来た人たちとは、見方や感じ方が変わらないでしょうか？ イエス様が、これからイスラエルの民に宣教の働きを行なわれる時、その歴史、苦しみの歴史を共にされるといことは、神の贖いの計画としてふさわしいことだったのです。

## 1A エジプトにて 13-15

### 1B 幼子を守る主 13

13 彼らが帰って行ったとき、見よ、主の使いが夢でヨセフに現われて言った。「立って、幼子とその母を連れ、エジプトへ逃げなさい。そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を捜し出して殺そうとしています。」

「彼ら」とは、東方の博士たちのことです。彼らが行った時に、「見よ、主の使いが」と言っています。マタイは、聖書に出て来る他の預言者と同じように、目に留めるべき事柄が起こった時に、「見よ」と言います。2章1節で、「見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て」と言いました。そして、「主の使い」ですが、ヨセフが、許嫁のマリヤの妊娠について困惑していた時に、同じように夢の中で現れました。東方の博士に対してもそうですが、主が夢によって行くべきところを指し示しておられます。イエス様の誕生に関して、ルカによる福音書でもそうですが、御使いが数多く介入しています。バプテスマのヨハネの父から始まり、マリヤ自身もそうでした。そして、ダニエル書において、油注がれた者が与えられることとダニエルに示したのは、天使長ガブリエルでした(9章)。黙示録12章には、ミカエルとその使いが竜とその使いと戦っている場面がありますが、その竜が女を滅ぼそうとしている場面が出てきます。御使いが、この幼子を巡って戦い、また手助けをしていることが目立っています。この誕生と幼子イエスが、いかに神のご計画にとって大事なものであるかを、物語っています。

「エジプトへ逃げなさい」と主の使いが言っています。エジプトは、逃避するにはごく自然な場所でした。ローマがエジプトを当時、既に支配していましたが、ヘロデ大王の管轄からは外れているからです。そして、そこには約100万人ものユダヤ人の共同体があったと言われます。そしてイスラエルの歴史を見ると、イスラエル国内にいと逃げている人々の姿が書かれています。例えば、ソロモンに追われたヤロブアムがエジプトに逃げました(1列王11:40)。他にもウリヤという預言者がエジプトに逃げたことがエレミヤ書に書いてあります(26:21)。そしてここでは、ヤコブの家族がカナンの地で飢饉になったので、次のホセアの預言を見ると、ヨセフが呼び寄せてエジプトに下ったということが重ね合わせているのでしょう。

ところで、古来からのキリスト教の教派に「コプト教」があります。エジプト発の教派です。マルコ

が福音をエジプトに伝えたところから始まったと言われていますが、彼らはこの、ヨセフの家族が幼子イエスを連れてエジプトに避難したという話を、最も大事にしています。

## 2B 出エジプトとの一体化 14-15

14 そこで、ヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに立ちのき、15 a ヘロデが死ぬまでそこにいた。

ヨセフは、主の使いの言うことを、そのまま聞いて、すぐに行動に動いているのが特徴です。1章においても、主の使いから、マリヤを妻として迎えなさいと命じられたら、その夢から目覚めたら、すぐにマリヤを迎え入れ、マリヤが主産するまで夫婦の関係を持たず、さらに、子供の名をイエスと名づけました。このように、神からの啓示に非常に従順です。ここでは、夜逃げをするぐらいすばやく動いています。「幼子とその母」とありますが、幼子を先に持ってくるというのは、幼子を守る事がこの旅の目的だからです。

かつて、ユダ王国にアハズヤという王がいました。その母アタルヤは、自分の息子が死んだと聞いたら、直ちに王の一族をことごとく殺しました。けれども、アハズヤの姉妹が、殺される王の子どもたちの中から、急いでアハズヤの子ヨアシュを盗み出し、彼とその乳母とを寝具をしまう小部屋に入れて、彼を隠したとあります(2列王 11:2)。ユダの王位がここで断ち切られるところを、かろうじて免れたのです。そして祭司がエホヤダが彼を教育して、七歳の時に主の宮から彼を出し、ヨアシュが王として即位しました。アタルヤはその時に発狂しますが、その場で捕まえられ、処刑されます。

これと似たようなことが起こったと言ってよいでしょう。ユダヤ人のまことの王は、キリストであり、民を罪から救うイエシュアです。この方こそが神の相続者、神の君主であられ、神の子孫となるキリストを信じる者たちを数多く生み出すのです。その根を断ち切ろうとする悪の勢力が厳然と存在しているということでもあります。黙示録 12 章には、その霊的戦いが書かれています。女として描かれているイスラエルの前に、赤い竜、すなわちサタンがいました。そして、こう書いてあります。「また、竜は子を産もうとしている女の前に立っていた。彼女が子を産んだとき、その子を食い尽くすためであった。(4 節)」

15b これは、主が預言者を通して、「わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した。」と言われた事が成就するためであった。

これは、ホセアの預言ですが、どう考えてもホセア書 11 章 1 節にあるこの言葉の文脈からは、この「わたしの子」とは、メシヤのことではなくイスラエルの民のことを指しています。11 章では、この後にエフライム、つまり北イスラエルのことが書かれており、メシヤではなく、イスラエルの民

全体の事、つまり出エジプトのことを指しています。

しかし、マタイは意図的にこのことを行なっています。それは、イスラエルを救われる方、メシヤ、キリストが、イスラエルと一つになることによって、救いを成し遂げようとされているからです。預言者イザヤも、同じようなことを話しました。49章3節で、「そして、私に仰せられた。『あなたはわたしのしもべ、イスラエル。わたしはあなたのうちに、わたしの栄光を現わす。』」とあります。文脈では、どう見ても、この方はメシヤ、キリストなのです。イスラエルの民ではなく、イスラエルに救いをもたらす方なのです(6節)。

そもそもマタイは、イエス・キリストの働きを、私たちの間に住まわれる方として描いています。思い出してください、初めに系図からイエス・キリストを紹介して、確かにダビデの子であり、アブラハムの子孫であることを示しました。けれども、この方は神からの方であり、聖霊によってマリヤがみごもったことも記しています。そして、インマヌエル、神が共におられる、という預言が成就したと記しています。イエスが幼子として現れたというのは、神ご自身が人と一体になられたということです。ここに、福音があります。私たちの信じている神は、空想でも、心の持ちようの話ではないのです。現に生きておられる方であり、生きておられる方なのです。それは、肉体を持つということをしてくださったことによって、神が私たちと共におられることが分かるようにしてくださったからです。

そして、イエス様はイスラエルと一つになられることによって、「イスラエルよ、わたしを信じなさい。」ということができるようになります。その苦しみ、痛みも、同じ傷を負っているのですから、分かっているのです。

## **2A ラケルの泣き叫び 16-18**

### **1B 王による虐殺 16**

16 その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年令は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。

ヘロデの残虐さは、聖書に出て来る他の支配者の残虐さにも見られるものでした。彼は、そもそもが博士たちからこの子の居場所を突き止め、殺すつもりでした。それができないと分かると、その生まれた時間から、二歳以下のベツレヘムに住む子を標的にして、みな殺したのです。

非常に激しく起こって、残虐な行為を働いた者としてはネブカデネザルがいます。自分の立てた像にひれ伏さない者は、燃える火の炉の中に投げ込まれるという布告を出して、ダニエルの三人の友人が触れ伏さなかったことを知って、呼び出したところ、決して拝礼しないことを明言したら、彼は非常に怒って、炉の火を七倍に熱くしろと命じました。そして、先ほど言及したパロです。彼は、

生まれて来る子が男の子であれば、殺しなさいと命じましたが、助産婦シフラとプアは、神を恐れてそれをしませんでした。するとパロは全ての民に対して、「生まれた男の子はみな、ナイルに投げ込まなければならない。(出エジプト 1:22)」と言ったのです。

## 2B バビロン捕囚との一体化 17-18

17 そのとき、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した。18 「ラマで声がする。泣き、そして嘆き叫ぶ声。ラケルがその子らのために泣いている。ラケルは慰められることを拒んだ。子らがもういないからだ。」

マタイは、ここでもユダヤの歴史の中にイエス様が入られたことを述べています。このエレミヤの預言は、全く、違う文脈で話されています。さらに、エレミヤ自身も「ラケルがその子らのために泣いている」と言っているのも、文字通りのことではありません。けれども、ユダヤ人の母親がどのように苦しんでいるのか、泣き叫んでいるのかは、共通しているのです。今、ベツレヘムで泣き叫んでいる母親たちは、イスラエルの歴史において続いてきた母親の泣き叫びを受け継いでいるとさえいえるかもしれません。

まず、ラケルの悲しみを思い出してみましょう。ラケルは、二人の男の子を生みました。ヨセフ、そしてベニヤミンです。ずっと不妊だったところ、神が憐れんでくださいました。しかし、ラケルは、ベニヤミンを生む時に、難産により死んでしまいました。そこが、ラマというところですが、ベニヤミン族の領地になるところです。そこが、エフラテに行く道であると書かれています(創世 35:16)。そして、そのヨセフとベニヤミンですが、それ以後、母親がいない中で育ちました。しかし父親の寵愛を受けました。ところが、兄たちがヨセフをエジプトに売りました。そして、ベニヤミンまでがエジプトで拘束されました。ヤコブは、ヨセフだけでなくベニヤミンも失ったと泣き悲しましました。

そして、エレミヤは預言で、バビロン捕囚によって自分の子たちが連れて行かれるのを見て、嘆き悲しむ母親の姿を、ラケルの嘆き叫びと呼んだのです。ネブカデネザルがユダの民をバビロンに捕え移す時、ラマにまで彼らを集め、それから連れて行きました(40:1)。一度集めたところがラマだったのです。したがって、私たちの主は、出エジプトの苦しみの歴史と一つになっただけでなく、父祖ヤコブの苦しみ、それからバビロン捕囚の苦しみと嘆き悲しみを味わわれたのです。イエス・キリストの系図を思い出してください。そこにも、しっかりとバビロン捕囚の歴史があり、それ以後の、ヨセフに至るまでの系図があります。

## 3A ナザレ人 19-23

そして、イエス様は、軽んじられ、蔑まれる道も選ばれます。

## 1B 王の死 19-22

19 ヘロデが死ぬと、見よ、主の使いが、夢でエジプトにいるヨセフに現われて、言った。20「立て、幼子とその母を連れて、イスラエルの地に行きなさい。幼子のいのちをつけねらっていた人たちは死にました。」

ヘロデ大王が死にました。紀元前四年から紀元前一年と言われていました。彼は慢性腎不全で死んだと言われていました。彼の残虐さは、死ぬとき、いや死んだ後まで及ぼそうとしていました。ヨセフによると、彼は誰も、自分の死を哀しんでくれないと心配して、自分が死の床にいるエリコの宮殿にまで、有名な人々の一団を呼び寄せ、彼が死んだと同時に彼らを処刑するように命じていました。それで彼が死んだ時に、その人たちが死んだのを嘆き悲しむ声を聞いて、ヘロデの嘆き悲しむ声に聞こえるようにさせようとしたのです。けれども、幸いなことに、息子アケラオはその遺言を実行しませんでした。

これほど恐ろしい大王が死んだ時に、再び、「見よ、主の使いが、夢でエジプトにいるヨセフに現われて、言った。」とあります。思い出せますか、13 節に、「私が知らせるまで、そこにいなさい。」と天使は言っていました。ここでもまた、「幼子とその母を連れて」と言っています。母の前に幼子が来ています。幼子を守ることが、ヨセフと母マリヤの使命だったのです。

「イスラエルの地に行きなさい」とありますが、先ほど言いましたように、ヘロデの統治する地のことです。似たようなところを通った人がいますね。イエス様はダビデの子ですが、ダビデ本人が自分を殺そうとする義父サウルがいて、ユダの地から離れようとしたら預言者から戒められました。けれども、一時期、ペリシテ人の王のところにとどまっていた時もあります。ユダヤ人の王が、イスラエルの地で命が狙われるという皮肉が起こったのです。けれども、笑ってはいられません。私たちの人生の主であられる方、イエス様が、私たちの心から締め出される、追い出されるということは十分あり得るからです。

21 そこで、彼は立って、幼子とその母を連れて、イスラエルの地にはいった。

ヨセフは、従順に天使の命令に従っています。かつてノアも、同じように従順な人でした。箱舟を造りなさいと命じられたら箱舟を造り、箱舟に入りなさいと命じられたら入り、そして洪水が引いて、地面が表れても待っていて、箱舟から出なさいと命じられて、それでようやく出てきました。このように従順なヨセフですが、興味深いことに、イスラエルの地に入ってから、少しだけ戒めを受けます。

22 しかし、アケラオが父ヘロデに代わってユダヤを治めていると聞いたので、そこに行くとどまることを恐れた。そして、夢で戒めを受けたので、ガリラヤ地方に立ちのいた。

「アケラオが父ヘロデに代わってユダヤを治めている」とありますが、ヘロデが死んだ後に、三人の息子にイスラエルの地が分割統治されました。アケラオ(あるいは、アルケラオス)が、王国の中心になるユダヤと、イドマヤ、そしてサマリヤ地域を支配しました。そして、ヘロデ・ピリポ(フィリップス)は、ガリラヤ湖の北東部分を受け継ぎました。イエス様は、独りで退かれたり、弟子たちを連れて行かれる時、ピリポ・カイザリヤなど、この地域が比較的、安全で、ほっとできる場所であったようで、ヘロデ・ピリポは比較的、良い政治をしていたようです。そして、もう一人が、ヘロデ・アンティパスです。これは、ガリラヤと、ヨルダン川の東ペレヤ地方を支配します。彼、ヘロデ・アンティパスが、イエス様が成人になってガリラヤ地方で宣教をされた時に出て来るヘロデであり、彼がバプテスマのヨハネを斬首し、またイエス様が十字架に付けられる時にエルサレムにいたヘロデです。

けれども、アケラオがユダヤを治めている時は短いものでした。彼は暴虐で無能な振る舞いに、ローマ政府自体がしびれを切らし、彼を遠くに追放して、それでその地域はローマの直轄領になったのです。ユダヤ属州と呼ばれるようになります。その都がカイザリヤであり、ポンテオ・ピラトが後に総督になります。

そこで、ヨセフが恐れているのです。アケラオも暴虐な人間であることを知っていたのです。つまり、裏返すと彼はユダヤに留まる、おそらくはベツレヘムに留まろうとしていたのです。ヨセフの生家はナザレですが、アウグストの住民登録の布告によってベツレヘムに動いて来て、イエス様がお生まれになって以来、そこに住み着こうと思ったようです。ところが、アケラオが支配しています。そうして心配しているうちに、「夢で戒めを受けたので、ガリラヤ地方に立ちのいた」とあります。ナザレの町のあるガリラヤ地方です。神は、なぜガリラヤ地方にイエス様を動かされたのか？ マタイはここで話していませんが、4章において話しています。イザヤの預言があるからです。

## 2B ナザレへの帰宅 23

なぜ、ユダヤにヨセフは留まりたかったのか、その訳を想像できるのが、次の最後の節です。「23 そして、ナザレという町に行って住んだ。これは預言者たちを通して「この方はナザレ人と呼ばれる。」と言われた事が成就するためであった。」

どこを探しても、ナザレという町は旧約聖書の預言に出てきません。けれども、それは日本語の聖書を見ているからです。イスラエル旅行に行けば、ナザレの町のところに標識がそのまま「若枝」になっているのです。ネツェルと言いますが、それは枝とか若枝の意味です。ですから、ここでマタイは、「預言者」と言わず、「預言者たち」と言っているのです。代表的な預言を引用します。イザヤ 11 章 1-2 節です。「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。…」これはまさにメシヤの預言ですね。若枝、ネツェルはまさにメシヤの称号です。

しかし、大きな枝ではなく、若枝というのは小さく、目立たないものです。けれども、後に大きくなっていく期待もあります。ダビデの父エッサイは貧しい家庭でした。その中でダビデは末の子で、羊飼いでした。卑しいところから出てきて、それでイスラエルの王となったのです。主も同じように貧しい家庭から生まれました。彼らが捧げたいけにえが、鳩であったことからそれがうかがえます。そういう存在が若枝です。イザヤ 53 章には、「砂漠の地から出る根のように育った(2 節)」とあります。そして、イエス様は蔑まれ、病の人、打ち傷を負う人となっていきます。

ナザレという町の人口は数百人だけだったと言われています。今、そこには受胎告知教会が建てられていますが、その敷地に村全体が収まってしまっていたのではないかとされるほどです。そして、ローマの駐屯地があったそうです。それでユダヤ人はローマを嫌っていたので、それでナザレという町は蔑みの対象でした。ナタナエルの言葉が有名ですね、「ナザレから何の良いものが出るだろう。(ヨハネ 2:46)」もしかしたら、これがヨセフがナザレには戻らず、自分の家系の町であるベツレヘムまたユダヤに留まりたかったのではないか？と思われる理由です。

しかし、神は敢えてイエス様をナザレへと戻されたのです。これもまた、この方が卑しめられている者たち、蔑まれている者たちのほうに一つになるためであります。ですからイエス様は幼子の時に、イスラエルの者たちに、しかもイスラエルの小さき者たちに一つになる道を辿られました。パウロがその目的をコリント第二、比較的裕福な人々の住む町のキリスト者に語りました。「8:9 あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」そう、私たちが人から見捨てられるのではないか？と思われる負い目、そういったところに主は共におられます。その貧しさの中に、ご自身の貧しさをもって近づいてこられ、そして富んでいる者なのだということができる、その信仰の宝を与えてくださるのです。



## 悲しみを知る人

The fact that the family moved to Nazareth was once again said to be in fulfillment of prophecy (Matt. 2:23). However, the words **He will be called a Nazarene**, were not directly spoken by any Old Testament prophet, though several prophecies come close to this expression. Isaiah said the Messiah would be “from [Jesse’s] roots” like “a Branch” (Isa. 11:1). “Branch” is the Hebrew word *nešer*, which has consonants like those in the word “Nazarene” and which carry the idea of having an insignificant beginning.

Since Matthew used the plural **prophets**, perhaps his idea was not based on a specific prophecy but on the idea that appeared in a number of prophecies concerning Messiah’s despised character. Nazareth was the town which housed the Roman garrison for the northern regions of Galilee. Therefore most Jews would not have any associations with that city. In fact those who lived in Nazareth were thought of as compromisers who consorted with the enemy, the Romans. Therefore to call one “a Nazarene” was to use a term of contempt. So because Joseph and his family settled in Nazareth, the Messiah was later despised and considered contemptible in the eyes of many in Israel. This was Nathanael’s reaction when he heard Jesus was from Nazareth (John 1:46): “Can anything good come from there?” This concept fit several Old Testament prophecies that speak of the lowly character of the Messiah (e.g., Isa. 42:1–4). Also the term “Nazarene” would have reminded Jewish readers of the similar-sounding word “Nazirite” (Num. 6:1–21). Jesus was more devoted to God than the Nazirites.<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> Barbieri, L. A., Jr. (1985). [Matthew](#). In J. F. Walvoord & R. B. Zuck (Eds.), *The Bible Knowledge Commentary: An Exposition of the Scriptures* (Vol. 2, p. 23). Wheaton, IL: Victor Books.